

日本SOD研究会報

特集 愛飲者インタビュー①

4歳で亡くなった娘が 教えてくれた農薬の害 ひとの身体は食べ物で 作られている だからSOD

東京都にお住まいの廣田紗江さん (85歳)

発行元 日本SOD研究会 宮城
住 所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川1-15-2 B棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
<http://www.niwa-medical.com>

神奈川県と東京都を挟む多摩川。そのほど近く、閑静な住宅街にお住まいの廣田紗江さん。いつもなら多摩川の土手を散歩するのが日課なのですが、新型コロナウイルスのおかげで散歩すらソーシャルディスタンスを気にして遠慮しているとか。

そんな自宅におじゃましたのは、いつになく長い梅雨が明けきれない7月の下旬でした。85歳と伺っていたのであまり長居は禁物と早々にお話をうかがってお暇しようと思っていたのに実に4時間近くも長居してしまいました。そのわけは、まず、なによりも紗江さんがお元気で面白いこと。そしてあまりにも魅力的すぎるお人柄とその人生のお話でした。4時間がまるで昭和時代の映画を観ているようにあつという間にすぎ、最後にはニューヨークのカーネギーホール舞台にも立たれたというハーモニカの演奏を披露してくださいました。

教師の夢をあきらめ 大所帯の嫁として働きづめ

東京のと真ん中、日本橋に生まれ、幼少期は疎開先の新潟で自然に囲まれ伸び伸びと育った紗江さん。子供の頃からいつも周囲の大人に、なぜ

なぜ? どうして? と聞きまわる好奇心旺盛な少女でした。夢は学校の先生になること。

「女の子は勉強なんかいらない。縫物や料理をやりなさい」

「当時は大学に行く女子などほとんどいなかったです」

そんな時代に紗江さんは大学進学をしたのです。しかも4年制の共学に。

「本当は理数系が得意でしたが、女子は文系といわれやむなく英文科を専攻しました」

そして念願の教員試験にも合格し、あとは初出勤を待つというときに、急に縁談が持ち上がったのです。今の時代なら、夫婦で共働きなどあたりまえのことですが、当時の女性はよほど生活に困っていない限り、結婚したらほとんどが専業主婦でした。「そりゃ教師になりたかったです。でも、夫は新聞社勤務で転勤も多いということ、女性があきらめるのは当たり前の風潮でした」

さらに結婚すれば夫の両親と同居するのも当たり前のことでした。杉並にあったご主人の実家は24坪(小学校の校庭相当の広さ)もある旧家。廣田さん夫婦は離れの一軒家で生活を始め、お手伝いさんには若奥様と呼ばれていたとか。なんだか石原裕次

郎さんが出てくる映画のような世界ですが、やはり昭和の嫁の立場はいろいろ大変だったようです。

「主人の両親に加え祖父が健在で、主人の10歳年上の姉も同居していました。シングルマザーで、5歳の娘もいました。さらに主人の15歳年上の兄嫁が生まれたばかりの娘を残して他界して、私からすると姪にあたる赤ちゃんを預かり、私にも長女が生まれて大忙しでした。育児をしながら大きなお屋敷の広い廊下を毎日水拭きし、全員の洗濯物をたらいで洗うんですから」

頭の中を整理すると、おじいさまを含め姑が3人。小姑が1人。姪が2人に廣田さんご夫婦に長女。4世代9人家族ということになります。毎日が戦場。睡眠時間は平均3時間だったとか。そこから一息ついたのが、数年後。ご主人の転勤で福島に引っ越したときでした。

「転勤先では、生まれたばかりの長男と、長女、主人と私、一家4人の生活でした」

農薬の被害を受けて悟った 有機栽培と旬の食材

ようやく親子水入らずの生活が始まったのですが、事件はこの地で起

きてしまいました。

「下の子(長男)が生まれたばかりだったので、長女を近所の同い年の子供のいる方と遊ばせていたんです。その方は中国から引き揚げていらしたご一家で、日本の決まり事などに疎かったんだと思いますが、近くの田んぼで遊ばせていたんです。ところが、当時、農薬を散布した直後は入ってはいけませんという赤い旗を水田ごとに立てていたんですが、子供たちが赤い旗が気に入って、その周辺で遊ばせていたらしいのです。赤い旗が農薬散布の意味があることを知らなかったんですね」

この農薬が、有名な水俣病の原因にもなった水銀を含んだ農薬だったのです。水俣病というのは、1956年に熊本県水俣市で発覚し、1968年によく公害認定された、メチル水銀を含んだ工場排水が原因で全身麻痺や死に至った病気のことです。

「始めは手足に湿疹ができて、アブかなんかに刺されたんだろうと思っていたのが、なかなか治らなかった。冬になってようやく治まったんですが、翌年、また同じ症状が出たと思ったら、今度は身体がしびれて手足が麻痺してきたんです。原因が分かったのがその時で、もう手遅れだった

んでしようね」

赤い旗は農薬の旗、それは地元の農家さんや小学校では認知されていたことでしたが、中国から引き揚げたいらしたばかりの方には分からなかった。当時はそんな危険なことが多々あったでしょう。みんなが沸き立っていた高度経済成長の陰にどれだけの犠牲があったことか。そのとき、医者からアメリカの新薬を試してみないかと言われて試したのがプレドニゾン、つまりステロイド、副腎皮質ホルモンでした。喘息、アトピー、リウマチなどすべての炎症、感染症、腫瘍などありとあらゆる疾患に効果的なスーパームデイスンと言われていました。

「4歳の小さな弱った身体にはその薬は強すぎたんでしようね。結局、3回投与したあと、娘は4歳10か月でこの世を去りました。あのとき強い薬を投与したのは間違いだったんじゃないか。でも何もなかったら、水俣病の方々のように手足だけでなくしゃべることも不自由、人の手を借りないと生きていけない人生を送ることになる。それで娘は幸せか？本当にあれこれ思い詰め、自分を責めましたね。以来、薬物に関してはものすごく気にするようになりました。薬の副作用もそうですが、特

に日々口にするものは無農薬にこだわってきました。例えば、海苔は購入産地を時々変えるんです。同じ産地のものばかりだと、川から海への排水に異常があったとき、その害が海苔の中に含まれてしまうから。同様に卵を使用するマヨネーズも、メーカーを時々変えるようにしているんです。同じ産地の卵ばかりではないものも悪いものも体内に蓄積されてしまうから、変更したほうが体内への負担が少ないでしょ？とにかく、あれ以来、無農薬、国産、有機栽培、旬のものにはこだわってきましたね」

農薬に水銀の使用を禁ずる法律が発令されたのは、お嬢さんが亡くなった翌年、1973年のことでした。無農薬、有機栽培が一般的になったのはそこからさらに20年近くの年月が必要でした。

姑2人の介護で心筋梗塞に 以来20年以上にわたり SOD愛飲

その後、廣田家には新たな女の子が生まれ、福岡の転勤を経て東京に戻ってきました。そして紗江さんはハーマニに魅せられ、師範の資格を取得し、今日まで50年間演奏にいらしていらっしやいます。腕前は、



プロ仕様のハーモニカが20本以上。一度に2本、3本を駆使し、ひとりオーケストラのような演奏に感動します。

カーネギーホールで演奏という冒頭の紹介でもお分かりのことと思います。今は指導と共に、地域のシルバークラスターなどでボランティア活動も行っています。

そんな紗江さんがSODと出会ったのは、今から20年以上も前のことになります。

「30年ほど前、我が家には義祖父、義父母と3人の要介護の老人がおりました。当時は今みたいに介護制度もきちんとしていなくて、嫁が姑たちの面倒を見るのが当たり前だったんです。主人はその時単身赴任で東京にいて、私ひとり3人の介護をしたんです」

特に100歳直前に亡くなった姑は約5年間寝たきりで逝かれたそうです。その5年間、紗江さんの睡眠時間は平均3、4時間だったといいます。

「そのストレスで20年前に狭心症になったんです。急に胸が締め付けられるように苦しくなったんです。目

の前が真っ暗になり、立てなくなり、もうダメかと思いました。病院で狭心症だといわれ、睡眠不足や無理は禁物だと。そのときに、以前から無農薬の商品など身体にいいものを勧めてくれる、お店の方からSODを勧められたんです。昔からとても信頼しているお店でしたから、試してみよう」と

無農薬だけでなく産地にまでこだわってきた紗江さん。単に人に勧められただけでそう簡単には信用しませんでした。口に入れるものはなおさら、さらにご主人が新聞社勤務ですから、情報収集には事欠きません。

「子供の頃から活字が好きで、身体に関する本もすぐたくさん読みましたね。SODのことは、昔から愛読していた『暮らしの手帖』(家庭向け総合生活雑誌で、創刊から広告は載せないというポリシーのもと、掲載商品は実際に商品テストをすることでも各方面から信頼度が高い。雑誌のアカデミー賞といえる菊池寛賞も受賞している)に紹介されていたのも信頼のひとつでした。」

「といて見せてくださった本棚には健康関連の書籍がびっしり。これはほんの一部ですがと言われました。さすがです。」

「とにかく抗酸化食品が大事なんで



健康に関する本がいつも手元に置いてあります。

す。抗酸化、つまり身体を錆びさせないことですよね。だからSOD。これこそがいちばん効果的な抗酸化食品だと思うんですよ。自分の選択に間違いはないと信じ切っています」

そう断言する紗江さんは、20年以上もSODを愛飲しています。これこそが信頼の証かもしれません。

「私、3日坊主がいやなんです。だからこれだと思ったらずっと続けるんです」

と笑われるが、狭心症は決して治っているわけではなく、持病として付き合っているそうですが、やはりSODが心強い味方だと。

「二トログリセリンはもしもの時のためにいつも持ち歩いているし、心電図もちゃんと狭心症のグラフになっているけど、SODを愛用してから大きな発作はないんです。主治医の先生からも、狭心症という持病があるのに、それにしては元気ですね、と驚かれています」

人の身体は食べ物からできている、だからこの50年間、白いお米はお寿司以外は食べず、胚芽米を常食にしているとか。

「人生、20〜30代は治療期なんです。病気がなったら治すし治る。すぐに治療して元気に戻る。そして40〜50代は予防期なんです。これは文字通り、予防、病気にならないように心がける時期。そして60代以降の老年期に入ると、あとは健康を維持するように心がける。つまり、若い時に無理して60代以降にそのつけが回ってくると、完治するのが難しい。人の身体は個人差こそあれ、そういう仕組みなんだと思います」

だからこそなおさら食事と食材、口に入れるものに気をつける必要があるのかもしれない。

紗江さんはハーモニカ奏者であるだけでなく、日本詩人クラブ、日本文芸家協会会員の詩人でもあります。その詩にこんな一節が詠まれています。

現代は 驚異の医学時代の前夜であらうか

門外漢の私ではあるが

復元・再生の時代を迎えていると

知らされる

どこまでが「生体」の問題で

どこからが「生命」の問題なので

あろうか

「ヒト」の再生医学の分野では

「こころ」の有りようをどう捉えたらよいのか

3年前にご主人を亡くされ、今はお屋敷から住みやすいマンションに引っ越し、初めての一人暮らしを満喫。7人のお孫さんにも恵まれました。

「いま、こうやって元気でいられるのも、亡くなった娘が、農薬はだめだよ、薬には気をつけてね、と教えてくれているからだと思うのです。娘のおかげなんですね」



SOD愛飲者 インタビュー②

子供の頃から弱かった胃腸が 医食同源のSODですっかり元気に

愛知県にお住まいの坂田喜朗さん（77歳）

「ああ、はいはい！ 大丈夫ですよ！」

電話口から高らかに響き渡る張りのあるお元気な声。それが今回インタビューさせていただいた坂田さんです。御年77歳。後期高齢者に突入

されたとおっしゃいますが、最近の高齢者はみなさんお元気。とくにSOD愛飲者の方々のお元気なことには驚かされるばかり。仕事に疲れ果てた40代、50代よりも見た目も中身も間違いなくお若い方がたくさんいらっしやる。

「今でこそSODのおかげで元気ですが、子供の頃は虚弱体質だったんですよ」

坂田さんは現在は名古屋市内にお住まいですが、出身は同じ東海地方の岐阜県の山岡部。

「当時の田舎なんて、今みたいに清潔じゃなかった。家の中に牛がいて、ハエもいっぱい飛んでいるようなところで生活していたんですから、み

んなそんなに健康状態は良くなかったと思いますよ。私も胃腸が弱く、おまけに小学校の3年生のときに小児麻痺になったんです」

終戦の数年前に生まれた坂田さん。子供の頃は戦後の混乱期。日本が懸命に復興へと歩み始めた頃でした。ほとんどの道路は舗装されていなくて、風が強いとほこりが舞い上がる。そんな環境ですから、感染症も多かったといえます。日本に感染症予防接種法が公布されたのが昭和23年（1948年）。坂田さんが5歳

の時でした。公布とはいっても全国で実施されるようになるまで数年かかることもあったとか。最初が天然痘ワクチン。次いで結核、日本脳炎、昭和36年のポリオワクチン実施まで実に15年近くかかっています。そのポリオというのが、坂田さんが小学生の頃に発症したという小児麻痺でした。当時は子供が命を落とす疾患

の代表的な病気だったとか。

「親ももうあきらめていたときにペニシリンという薬が入ってきて、それで助かったといえます」

小児麻痺、現代日本では、1980年以降の患者は発見されていないそうです（メディカルノートHPより）。ペニシリンは抗菌剤なので、菌に効果的。ペニシリン（抗生剤）で治ったということはおそらく、当時の田舎の医療では分からない病気は小児麻痺とされていたのかもしれませんが。

そんな時代から半世紀以上経った今、なお、ウイルスは人々を不安にさせているわけです。話はそれましたが、坂田さんの幼少時代はなにかあるとすぐお腹を壊したり、ケガをしたりの日々だったとか。

岐阜の山岡部から名古屋に出てきたのが昭和33年（1958年）。その後結婚して、2人のお子さんをもうけました。

「鉄工関係の工場に丁稚奉公みたいなものでした。それから50年余りですか？ 大変でしたが高度経済成長の最中ですから、みんな希望があった。今みたいに機械が何でもやってくれる時代ではなかったから、身体が資本だと思って頑張ってきたんですよ。おかげで口にするものには気を使って吟味していましたね」

胃腸が丈夫ではないという意識から、食べ物の鮮度や添加物の有無には人一倍気を使ってきたそうです。

「だって、医食同源っていうじゃないですか。人の身体は食べ物から作られているわけだからね。僕らの子供の頃はおやつといったらサツマイモをふかしたものだっただけ、今の子は酸化した油で揚げたポテトチップスとか、わけのわからん添加物や合成調味料がいっぱい入ったものを食べている。おまけになんでも殺菌でしょ？ そりゃあアトピーとかアレルギーが増えるわけですよ。ほんとに食べ物は大変」

実直一辺倒で人生を送ってきた坂田さんから、食は医であるという意味の医食同源の言葉を聞くと、なおさら重みを感じます。

奥様が胃がんの手術術後にSODで経過良好

そうして坂田さんは健康を保つてここまでできましたが、苦楽を共にした2歳年下の奥様に異変があり、貧血を訴えたのが5年前のことでした。

「めまいがすると言うので、病院で調べてもらったら、胃にがんが見つかったんです。それも、スキルス性のがんで、花火みたいにパーンと広がる

危ないがんだといわれましたわ。残念ですがこれは難しいと」

スキルス性胃がん、胃がんのなかで10パーセントを占めるのがんは、初期発見が難しく、発見時には広がっている場合が多いそうです。手術で切除しても再発も多く、予後が良くないがんのひとつだとか(メディカルノートHPより)。

「これはダメかなと思ったんです。それで手術をしてもらったら、意外にがんが広がってなくて、初期の症状だったみたいで、すぐラッキーだと思いました。それでも、先生からは、いつ再発してもおかしくない安心できないがんだから注意するように言われました」

そこから坂田さんの勉強が始まりました。根が真面目ですから、がんのこと、食事のこと、薬やサプリのことなど、理にかなったものを自分で納得するまで調べたそうです。

「ところが、がんに関する情報って、本当に多くて、溢れている状態じゃないですか。値段もそこそこしますから、何をチョイスしたらいいのかわからなくなってしまっただけです。そんなとき、いつもお世話になっている歯医者さんからSODを勧められたんです」

混乱しているときに信頼のおける

歯科医院の先生から勧められる情報は大きかったといいます。

「やっぱりね、身近に愛用して効果があったという話や、専門家の勧めはありがたいですね。家内のがんの再発や転移が一番怖かったですから、がんになった人は特にいいようだよと言われたことで、よし、飲ませてみようと思いました。いろいろ資料を見せてもらって、活性酸素を制御することで病気になるにくい体を維持できるというのは、納得でした。それにSODは無添加の身体にいい食べ物からできていますから」

そうして飲み始めたSOD。成人になってからは大きな病気をしなかった坂田さんですが、胃腸が弱い悩みはずっとあったそうです。

「軟便というか、よく下痢はしています

したね。疲れたり、脂っこいもの食べたりするともうすぐ。いつもゆるいという感覚があったんです。ところが、SODを飲み始めて1、2週間で、ゆるくなくなったんですよ。こんな体験、初めてでびっくりするやら嬉しいやら。以来、まあ、毎日快適ですね。家内も、抗がん剤なんかしないで、SODだけで再発も転移なく元気になっています。手術からもう6年ですからね。ありがたいです」

朝晩2包、夫婦で必ず食べるSODがなによりの健康法だとおっしゃる坂田さん。

「年齢のわりには活発に生活できているのも、SODのおかげだと思いますよ」

その活力あふれる声で、お元気なのが伝わってきます。

高齢者が新型コロナウイルスで 気をつけたいこと



新型コロナウイルスの脅威から逃れる絶対的な解決法はいまだ見つかっていません。世界各国が治療薬、予防ワクチンの開発を猛スピードで

行っているという話は聞きます。しかし、明確な目途はたっていない。私たちは新型コロナウイルスとまだまだ付き合っていかなければなりま

せん。

そこで新型コロナウイルスに対して、今回は一番不安に感じていらっしゃる高齢者の方々の疑問や対処法などをいくつかあげ、メディカルノート(現役の医師が運営する医療ウェブメディア)より、国立長寿医療センター理事長の荒井秀典先生の回答を紹介します。

高齢者のリスク

1 高齢者は感染しやすいというのは本当ですか？

「高齢者が新型コロナウイルス感染症にかかると、一般の人よりも重症化しやすいというデータはあります。しかし、高齢者が一般の人に比べて新型コロナウイルスに感染しやすいというデータは今のところありません。そのため、高齢者も一般の人同様、感染症予防対策をしっかり行っていれば感染しにくくなり、対策を怠っていれば感染しやすくなるといえるでしょう」

2 高齢者が重症化しやすいのはどうしてでしょうか。また、高齢者が感染したときの症状の経過は一般の人と違うのでしょうか。

「新型コロナウイルス感染症だけでなく

く感染症にかかった場合、65歳未満の人と比べて高齢者のほうが重症化しやすい傾向にあります。高齢者の感染症が重症化しやすい明確な理由は分かっていますが、加齢による免疫機能の低下や栄養の問題などが複合的に関係していると考えられます。新型コロナウイルス感染症の場合、高齢者は重症化するリスクが高いため強い倦怠感や息切れなど気になる症状があれば早めに病院の受診を検討する必要があります」

3 高齢者の中でも特に重症化しやすい人には何か特徴があるのでしょうか。

「高齢者のなかでも特に新型コロナウイルス感染症が重症化しやすいのは、喫煙習慣のある人や基礎疾患(持病)のある人です。特に以下のような病気にかかっている人は、重症化しやすいと考えられています。糖尿病、心疾患、慢性閉塞性肺疾患(COPD)高血圧症など。また、ニューヨークなどの例を見ると、経済的に困窮している人のほうが栄養状態や衛生環境などの理由により新型コロナウイルス感染症が重症化しやすいようです。高齢者がそのような環境に身を置いていると新型コロナウイルスに感染しやすく、感染後に重症化

しやすいことが懸念されます」

4 高齢者が重症化して亡くなる確率はどのくらいでしょうか。

「80代以上の新型コロナウイルス感染症による死亡率は10%程度といわれています。65歳未満の人の死亡率が、地域差はありますが平均的に見て1%未満と考えられているので、高齢者のほうが一般の人よりも死亡率が高いと考えられます」

5 高齢者が受診する目安は？

「高齢者の場合、37.5℃以上の発熱や風邪の症状が出てから2日程度で受診を検討しましょう。一般の人の受診目安はこれらの症状が4日以上続く場合(個人差があるので息苦しさなどがある場合は受診を)となっていますが、高齢者の場合、重症化するリスクが高いことを踏まえ、発熱とともに息切れが急に出てきたり、強い倦怠感があつたりする場合には早めの受診をおすすめします。受診を検討する際は、直接病院に行くのではなく帰国者・接触者相談センターに問い合わせる指示を仰ぐか、かかりつけ医に相談しましょう。また、高齢者であり、かつ基礎疾患を持っている場合には重症化するリスクがさらに高まるため、状況に応じて症

状が出てから2日を待たず、受診しましょう」

6 感染予防として日常生活で高齢者はどうすればいいでしょうか。

一般の人と比べて特に注意することは？

「予防に気をつけることは高齢者も一般の方も同じです。まず、三密を避けること。三密とは密閉、密集、密接を指し、人が集中して集まることです。それから、そのようなところに行くことは控えましょう。やむを得ず行かなければならないときは、マスクとできれば目を守る花粉症用のメガネなどを着用しましょう。そして、外出後や食事の前など、こまめに手を洗うことを心がけましょう。手洗いは石鹸を使用し、手のひらや甲だけでなく指の間や爪の先なども入念に洗います」

7 基礎疾患を持っている高齢者のなかには通院する必要がある人が多くだと思います。通院時に気をつけることは？

「マスク、手洗い、消毒などの感染症対策を徹底したうえで、今までどおり通院してもかまいません。特に基礎疾患に関する症状などが出ている場合は通院を控えることはしないで、

かかりつけ医を受診しましょう」

8 定期的な通院が必要な高齢者や薬の処方が必要な高齢者に対して、医療機関ではどのような措置を行うのでしょうか。

「2020年4月13日より電話やインターネットなどを利用したオンライン診療が行えるようになり、病院に足を運ばずに受診することが可能となりました。オンライン診療では通院の必要がなくなるので感染者と触れる機会がなくなり、感染の心配がありません。ただし、すべての方がオンライン診療を行えるわけではなく医師の判断のもとオンライン診療で診断や薬の処方が可能であるとされた場合など、条件を満たせば行うことができます。オンライン診療を希望する場合は近くの医療機関、またはかかりつけの医師に相談するとよいでしょう」

9 高齢者や高齢者施設にいる人は、日常生活でどのような対策をとるといいでしょうか。

「意識的に体を動かすようにしてほしいです。高齢者の場合、新型コロナウイルス感染症にかかって重症化してしまうことも恐ろしいのですが、感染症対策として外出しないことに

よって体を動かさなくなり、フレイルになってしまふことが懸念されます。フレイルとは加齢によって運動機能や認知機能が落ち、心身共に弱ってしまうことをいいます。フレイルになると転倒・骨折が増え、最終的に寝たきりになってしまう人もいます。ただ、感染症を予防するために三つの密を避ける必要があります。しかし、これは外出してはいけないうというわけではありません。そのため、感染症対策を行ったうえで外に出て散歩をする、軽い運動をするなど体を動かすことを意識してみましよう。また、天候・体調などの影響で外に出るのが難しい場合には、自宅でできる運動を取り入れ、座ったまま・寝たままでの時間を極力減らしましょう」

10 新型コロナウイルスの感染拡大によって高齢者における影響は何があるかと予測しますか？

「外出しなくなることによりフレイルになることが懸念されます。フレイルになってしまふと、これまで自分で日常生活を送っていた人でも運動機能や認知機能が落ち、介護が必要になってしまふことがあります。高齢者の場合、一度弱った運動機能や認知機能をもとに戻すことはなかなか

か難しいため、外出の難しい今の時期でも、継続的に体を動かすようにしていただきたいです」

今も刻一刻と感染拡大や医療現場の状況が変化し、これから季節がまたインフルエンザなどの感染症が増える冬に向かっている懸念もあります。私たちにできることは限られますが、SODで免疫力をつけ、みなさまくれぐれもご自愛ください。



SOD様作用食品 体験者の声を お聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川1-15-2 B棟2802

日本SOD研究会 宮城宛

TEL 03-5787-3498

までご一報下さい。

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
TEL 0120(731)175

もしくは
日本SOD研究会
TEL 03(5787)3498
まで お電話ください。

●SOD様作用食品とは●

丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されません。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの。私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐丹羽クリニック院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある